

論文

1. 日田地方におけるスギの品種に関する研究

第1報 品種の構成について

大分県林業課 長野 愛人・野仲 忠彦

1. ま え が き

1952年 Lindquist 教授の来朝を期として、林木育種についての関心が急速に高まったが、林木の品種に対する考え方は学者の間でも必ずしも一致していない。わけてもその分類のキメテについては論議が多い。

日田地方のさしきスギのように、いわゆるクローン・コンプレックスによつて構成されている品種を幾つかのタイプの集団に分けることは学問上にも問題があり、実際的にも困難である。

しかしながら、それぞれのタイプの造林学的性質に差異が認められるとすれば、これを何等かの型で分けて取扱うことが実用上は便利であろう。筆者等がここ

に品種というのは、このような意味においてである。

日田地方に伝わるさしきスギ品種の特性の比較については既往幾多の優れた研究がある。

しかし、おしむらくは同一環境においてその特性を比較した事例に乏しい。あらゆる環境において、各品種のあらゆる特性を吟味することは、実際に造林をおしすすめる上に最も大切なことであるが、それには同一環境において、それぞれの品種のもつ特性を調査したものを積み重ねることが望ましい。

幸い、日田郡上津江村の篤林家、井上篤氏の所有林の同一環境の林分内に20余種の品種を比較植栽したものがあつた。ちょうど間伐適令期にあるため、間伐指導をかねて調査を依頼されたので、この機会に品種別の特性のあらわれ方を調べてみた。

第1表 井上氏による品種の分類と本数配分

品 種 名	本 数	品 種 名	本 数	品 種 名	本 数	品 種 名	本 数
オカワバル	46	アオスギ	39	アヤスギ	34	ササンノ	32
エダナガ	14	ヂスギ	11	カミダニ	5	ホンスギ	2
ヤブクグリ	2	クマント	90	クマントザツ	5	クマントミゾ	1
ミゾスギ	22	ヨシノスギ	115	ヨシノ雑	32	ヨシノ純	27
ヨシノアオ	18	ヨシノミゾ	9	ヨシノヤブ	2	計	506

2. 品種の構成

0.412 ha の試験地内に506本のスギが概ね品種別に植栽されている。品種は日田郡上津江地方に伝わる在来のさしきスギを主とし、これに吉野系のスギを配している。吉野系のものもすべてさしきによつて増殖したものである。

所有者井上篤氏によつて色わけされた品種名と本数配分は第1表のとおりである。

井上氏は多年の実地造林の経験から、各品種の特性を巧につかまえて分類しており、加えて分類上の優れた識別力は敬服に値する。

一般に林木品種の呼称は人により、所によりマチマチであり、統一性と普遍性を欠くものが多いが、日田地方のスギの品種もその例外ではない。そこで筆者等は井上氏の分類をそのまま踏襲するとともに、今日一

第2表 筆者等による品種の分類と本数配分

品 種 名	本 数
ウラセバル	46
アオスギ	39
アヤスギ	34
リュウノヒゲ	32
ホンスギ	18
エダナガ	14
ヤブクグリ	4
オビアカ	90
クロスギ	34
ヨシノスギ(トサグロ型)	118
ヨシノスギ(トサアカ型)	58
ヨシノスギ(トサグロ)中間型	7
不明のもの	12
計	506

般に認められているスギの品種のタイプのなかでもこれを考えてみた。すなわち、井上氏の19の品種が一般的呼称の品種のどの系列にあるかを知るため、林業試験場の石崎技官にサンプルを送付して鑑定を仰ぎ、それに基づいて一本一本の樹木のいろわけを行つた、これは相当に骨の折れる作業であつたが、筆者等の品種

識別についての知識の未熟も手伝つて誤認も多いことと思う。もし誤りがあつたとしても、それはこのような理由によるものであつて、石崎技官の鑑定結果には全く関係がない。学兄諸氏の指摘を仰いで漸次訂正して行きたい。

第2表は筆者等の行つた分類である。

2. 日田地方におけるスギの品種に関する研究

第2報 品種別成長量の比較について(1)

大分県林業課 長野 愛人・野仲 忠彦

まえがき

筆者は第1報において日田郡上津江村井上篤氏の所有林内のスギ品種比較試験地において、品種の構成を明らかにしたが、本報告においては品種別の成長量の比較を試みたい。

なお、本報告においては毎木調査の結果に基づく総成長量の比較に止め、標準木の樹幹析解の結果に基づく、連年及び平均成長量や、成長率の比較並に樹令及び樹冠の疎開度等を勘案した成長量に関する全般にわたる検討は第3報に譲りたい。

1. 調査の方法

試験地を周測し、試験木一本一本に一連番号を附し、毎木調査を行つた。胸高直径は地上1.2米の最長、最短径を耗単位で測定し、平均値を使用した。

樹高は毎木につき実測することなく、試験地並にその周辺の同令林分の間伐木174本を伐採して実測し、樹高曲線(フリーハンド)により50種単位にて算出した。

このさい品種は考慮しなかつたが、品種による樹高

成長の差異については次の機会に検討したい。

なお、クローネの投影図を画き品種別の色わけを行う目的で林木の配置を実測したが、調査期間の関係で、調査未了である。近く再調査の上完成したい。

第1表はそのさい実測した林木配置図である。(表省略)

2. 胸高直径の測定

品種別直径配分(2cm括約)を示すと第2表及び第3表のとおりである。(表省略)

3. 樹高の測定

間伐木174本より求めた樹高曲線により算出した直径対の樹高は第4表のとおりである。(表省略)

4. 材積計算

材積の計算は熊本管林局の材積表を使用し、比例配分により、省径耗単位、樹高50種単位の材積を計算した。

その結果は第5表及び第6表のとおりである。(表省略)

3. 地方的マツ品種の直播試験について(第1報)

鹿児島県林業試験場 上野 一夫・八重 倉優

1. まえおき

マツ類は針葉樹の中で用途および適応性の面より重要樹種の一つであるが、先般幸に全国的に有名な12品種の適応試験を実施する機会に恵まれたので、さし

あたり播種後1年有余の観察的結果について述べたい。

2. 試験方法